

教員の使命と役割についての一考察 : 超自伝的教職論 教職をめざす人たちに伝えたいことあれこれ

著者名(日)	岡部 一宏
雑誌名	駿河台大学教職論集
巻	特別増刊号
ページ	36-55
発行年	2017-10
URL	http://doi.org/10.15004/00001804

教員の使命と役割についての一考察 ～超自伝的教職論：教職をめざす人たちに伝えたいことあれこれ～

岡部 一宏

1. はじめに

S 県の教員採用試験において、「教員の使命とは何か」という趣旨の問題が論文試験の課題として出題されたという。受験した若い臨時採用教員からこの話を聞き、自分だったらどのような論文を書くのだろうと思いを巡らせてみた。

「全ての子供たちを笑顔にする。それが教員の使命である。」という書き出しはどうであろう。「子供たちの笑顔」からは、自らの夢や目標に向かって意気揚々と歩んでいる子供の姿や周囲の者たちと良好な人間関係を築いている姿など、子供が子供らしく生き生きと学校生活を送っている様子がうかがわれるように思う。

全ての子供たちが笑顔で過ごす学級は間違いなく子供たちにとって居心地のいい心安らぐ空間であると思うし、全ての子供たちが笑顔で過ごす学校はきっと元気いっぱいの光あふれる学校であろう。そしてそのような学級・学校をつくることこそ、教員の使命であると考えます。

一方で昨今、教員の長時間勤務が社会的に問題になっている。S 県では小中学校教員は毎日約 3 時間の時間外労働を担っており「事務作業、部活が負担／働き方改革が急務」と新聞に活字が躍る。タイムカード等によって出退勤時刻を管理する、留守番電話を設置して勤務時間外の電話対応を制限する等、様々な取組が学校で始められている。教員という職業を考えると「それでも、時には子供たちのために時間外勤務やむなし」と考えてしまうのは、今や時代遅れなのだろうか。

38 年間、公立中学校を中心に「先生」と呼ばれる仕事をさせていただいてきた。総じて言えば、子供たちの笑顔や頑張りから元気をもらいたぶん自分らしく歩いてきた 38 年間だったと思う。多くの失敗や後悔の中に、それでもいくつか、子供たちとともに、いや子供たちのおかげで手に入れることができた確信のようなものがある。本論文では、そのいくつかについて記していくことにする。拙い経験をまとめていくので、論文というより自叙伝のような文章になってしまうことをお許しいただきたい。

2 授業者として

言うまでもなく、学校における教育活動の主要な部分を占めるのは学習指導である。子供たち一人一人が活気にあふれ目を輝かせるような授業を展開することは、教員として当然の務めである。自らを振り返るとき、授業者としての自分はその大部分が反省することばかりであるが、いつも「(たいへん平たい言い方だが)面白い授業をしたい」と思っていたことだけは自信を持って言える。子供たちも授業者もともに楽しめるような授業、いくつかの工夫がちりばめられた授業、ほかの教員がやったことのないような授業...をつくらうと常に研鑽を積むことが、子供たちを一步成長させることにつながるのだと信じていた。以下に自らの数学科教員としての実践の中で学んだことを記すことにする。

(1) 授業づくりは「レバニラ炒め」

管理職になってから自校の教員に配布した「校長室だより・校長のつぶやき」の一部を

紹介する。

授業づくりは「レバニラ炒め」

以前（N中学校教諭時代）校内研修で授業づくりに取り組んだ際、指導者の先生から「授業づくりは『子供たちにレバニラ炒めを食べさせる...』...と考えるとわかりやすいよ。」...とご指導いただいたことがある。

まず「全ての子供たちにレバニラ炒めを食べさせる」ことを目標とする。→本時の目標を具体的に掲げることが大切。「...を理解させる」「...を考えさせる」などは、具体的な目標とは言えない。

教材観・生徒観・指導観については...

「レバニラ炒めとは、どんな食べ物なのか」を明確にする。→これが教材観。中華料理のひとつで、材料はこれで、こんなふうに料理して、どんな地域で、どんな人たちに食べられているか...等々。実際の授業では、その単元で子供たちに指導する＝理解させる＝身につけさせる内容をはっきりさせておく。

「レバニラ炒めを子供たちがどう捉えているか」を記す。→生徒観。「レバニラ炒めはキライ」という子供たちが多く。アンケートを取ってみたら○○パーセントの子供たちが「キライ」と答えた。理由を聞いたら「レバーが苦手」という声が多かった.....等。生徒観には、その単元の学習についての子供たちの様子を記す。関連既習事項の理解度、興味関心の様子等...。その単元の学習について記すのであるから、「明るい」「おちついて」...等は不適。

「レバニラ炒めを子供たちにどう食べさせるか」工夫点等を記す。→指導観。レバニラ炒めの栄養価について細かく指導する、苦手なレバーは細かくきざんで調理する...など。実際の授業では、本時の目標を達成するための指導の工夫点をまとめる。プリントの活用、話し合い、ティームティーチング、視聴覚機器の活用...等。

さらに、その時の指導者のH先生は、目標が達成できた（できている）かをつねに評価し、その対策を考え、実践しながら、授業を進めることが重要...と教えてくださった。1時間1時間の授業づくり（授業の構築）に、楽しみながら取り組みたいものである...とも...

授業づくりをレバニラ炒めにたとえたこの時の研修は、約20年を経た現在でも、学習指導案作成に取り組む際の大きな支えになっている。

(2) 子供の学習意欲を喚起すること

「面白い授業をしたい」と前に記した。「面白い授業」とは何か。それは子供たちが興味・関心を持って意欲的に取り組む授業である。S県で実施している「学力・学習状況調査」は、「学習した内容がしっかりと身についているか」という従来多くの調査が目指していた視点に「一人一人の学力がどれだけ伸びているか」という新たな視点を加えた全国でも初めての調査である。S県ではこの調査結果を分析し「どのような学習指導をすると子供が伸びるか」を研究しているが、その中で「子供たちの学習に向かう心の部分(に指導を加えること)」が子供の成長（学力向上）に重要であるということが明らかになりつつあると聞く。子供の学習意欲を喚起することは授業づくりの中で最も大きなポイントであろう。自らの経験から具体

例を2つ記す。

① 導入の工夫

授業はスタートが勝負である。「この授業は面白そうだ」と子供たちに思わせる工夫がそこになくてはならない。1年間の最初の授業、あるいは新しい単元に入る最初の授業ではその重要性は一層増す。このような考えから、私は授業づくりにおいて導入課題にこだわった。どんな課題を提示すれば子供たちを学習に引きずり込むことができるか？身近な生活の中に課題はないか？どのような導入をすれば子供たちが「この学習は将来役に立つ」と思ってくれるか？子供たちの顔を思い浮かべながらあれこれ考えをめぐらすことは、自分にとってもワクワクする時間だった。全ての授業の導入で百点満点の課題を準備することは容易にできることではないが、導入課題にこだわる姿勢は持ち続けたいと今でも考えている。古い話だが「インベーダーゲーム（若い方々はお分かりにならないであろう）」が流行したころには、これを数学の授業の導入に使ったことを記憶している。生徒指導の観点で問題がなかったかについては、若干不安が残るが...

② 教育機器の利用

現代では「ICTの活用」と書くほうが正しいのかもしれないが、私が授業づくりに最も心を燃やしていた時代の言い方で、あえて「教育機器の利用」と書かせていただいた。私の場合、それはOHP（オーバーヘッドプロジェクター）の利用に始まり、平成の声を聞くころからコンピュータを授業に導入するという流れになった。

中学校で数学を指導するとき、子供たちにとって「数学」が「数楽」になるか「数が苦」になるかの最も大きな分岐点は2学年の図形の学習であると私は考えている。特に図形の性質を論証する学習は、数式の計算等とは全く異なり、子供の中にはまるで新しい教科に足を踏み入れたように感じる者もいるのではないだろうか。図形の論証は、数式の計算等をやや退屈に感じていた子供にとってはやりがいのある楽しい学習になることも考えられるが、逆に数式の計算等こそ「数学」だと信じていた子供にとっては戸惑いにつながり結果として数学嫌いを生んでしまうケースも考えられる。

そこで、私は図形の学習の場面にコンピュータ・作図ツールソフト「カブリ」を導入し、子供たちが関心・意欲を持って図形の学習に取り組んでくれるよう工夫した。「カブリ」はグルノーブル大学が開発したソフトで、パソコン画面上に自由に図を描き、さらに長さや角度を測定することができる。しかも作図した図形を変形することも可能なので、ある図形の性質が「常に成り立つこと」を視覚的に確認することができた。このソフトを利用した図形の学習によって「数学」が「数が苦」になってしまう生徒を減少させることができたと自負している。

(3) 学習の目標を明確にすること

授業づくりは「その1時間で子供たちに何を身につけさせるか、目標を明確にすること」から始まる。小学校では「本時のめあて」、中学校では「本時の目標」という形で学習指導案に記されることが多い。また、実際の授業においてはこの「めあて」や「目標」を黒板に明記するなどして、子供たちにも明らかにすることが大切である。

目標は、教育全体、教科、単元等、それぞれについて明確に示されるものであるが、特に1時間の授業の「めあて・目標」については、具体的であることがたいへん重要である。

「授業づくりはレバニラ炒め」の部分にも記したが、「...を理解させる」「...を考えさせる」などは、具体的な目標とは言えない。「...ができるようになる」「...を解くことができる」「...を自分の言葉で説明できる」等、目標を達成した子供たちの姿がはっきりとわかるようにすることこそ、目標を明確にするということである。

そしてこのことは、授業を（時には子供たちを）適切に評価することに直結する。例えば授業中に子供たちの様子を観察し、目標とする姿が表れている子供にはさらにその先の学習に進むためのチャレンジ問題を提示し、逆に目標とする姿にたどり着いていない子供には目標を達成するためのヒントを与える。授業終了後には、自分の力で目標を達成した子供はA、ヒントを活用して目標を達成した子供はB、目標を達成できなかった生徒はC...と評価する。この際、Cの子供にはさらなるアプローチが必要となる。授業者は常に全ての子供がAまたはB評価になるような授業づくりを目指さなければならない。そして、このように明確な評価をするための第一歩は「明確な目標を立てること」に他ならないと考える。

(4) 子供たちを活動させること

授業展開においては、子供の活動場面をより多く設定することに努めたい。「確かな学力」や「生きる力」は、体験や話し合い、教えあい、学びあいなど子供たちが能動的に学ぶことによって身につくものである。教員が説明し子供たちがそれを聞くといった古くからわが国で行われている授業形態は、もう時代遅れなのかもしれない。

数年前から「アクティブラーニング」という言葉が流行し、新学習指導要領には「主体的・対話的な深い学び」というキーワードが躍った。これらはまさに、子供たちをおおいに活動させ、そうすることによって彼らの将来にわたって生きて働く力を子供たちに獲得させようとするものである。

教員は子供たちが生き生きと活動するような、ひいては彼らの成長を支援できるような授業展開を常に工夫しなければならない。どのような課題を投げかけると子供たちは意欲的に活動するか、教材・教具はどうするか、生徒の座席はどのようにすることが効果的か、ペアワークやグループ活動をどの場面で導入するか等、さまざまに思いを巡らせながら授業づくりや教材研究に取り組むことは、教員にとって最高の喜びであるはずだ。

(5) 学力差を考慮すること

自分自身が数学の教員であることもあってか、子供の学力差を常に考えて授業づくりに取り組んできた。「個に応じた指導」という言葉はもうずいぶん使い古された感があるが、それはすなわち教育にとっての不易の部分ということであろう。

授業を展開する際、目標とする力をいち早く手に入れる子供もいれば、逆に目標にたどり着くのには多くの時間を要する子供もいる。本来子供たちは（大人もだが...）一人一人別々の個性を持っており、だからこそ人間関係づくりは面白い（難しいこともあるが...）のだと思う。この理解のスピードを考慮しながら、前述の「めあて・目標」を全ての子供にクリアさせようと考えるとき、授業づくりにはさらなるひと工夫が必要になる。

私は数学の日々の授業に、なるべく「ヒントカード」と「チャレンジカード」を持って臨むことにした。「学習の目標を明確にすること」の部分でもふれたが、課題を提示し子供たちにそれを解かせる活動の場面で、手こずっている子供には「ヒントカード」を渡してそれを活用して課題解決にあたるよう助言し、また早い段階で課題をクリアした子供には

「チャレンジカード」を配布してさらに上級レベルの課題に取り組ませて力を伸ばすようにした。この取組は授業の中に「無駄をつくらない」ことにつながり、学習効果を上げるには適切な取組であると信じている。

3. 学級担任として

私が教員になったころ「3年B組金八先生」というテレビドラマが大人気であった。武田鉄矢が扮する金八先生は桜中学校3年B組の担任として、生徒一人一人の思いにこたえて向き合い、学級で起こるさまざまなハプニングに真正面からぶつかってそれを乗り越えて見せた。多くの人が金八先生を理想の先生だと感じ、番組の視聴率は高いレベルを維持した。恥ずかしながら私自身も「金八先生ファン」の一人で、確か初任者教員として赴任したH中学校の4月の始業式で「金八先生に負けないように頑張ります!」と挨拶したことを記憶している。

実際に学級担任になってみると、それは楽しいことばかりではなく、むしろ頭を抱えるようなことにも数多く出会ったが、やっぱり「担任の先生」として子供たちとともに過ごした日々は今でもキラキラと輝く日々であったと思うし、最近ではかつて担任した教え子たちから連絡をもらい、酒を飲みながら昔話に花を咲かせるという至福の時間をしばしばプレゼントしていただいている。

(1) 子供に寄り添うこと

子供に寄り添うこと＝子供の近くにいること、これこそ教員として最も大切にしなければならぬことだと思う。院内学級で指導をされている昭和大学大学院准教授の副島賢和氏は、講演の中で「何も話さなくてもいい。そっと子供のそばにいる。これが大切なんだ。」と話されている。

子供に寄り添うということには、2つの意味がある。ひとつは実際に（物理的に）子供の近くにいること、そしてもうひとつは心の絆がしっかりと結ばれているということだ。子供と教員の間を考えると、後者の方が重要にも思えるが、私はいつも前者を大切にしてきた。なぜなら子供の近くにいることによってこそ、心の絆が築かれると考えるからだ。

39年前に教員採用試験を受けたとき、出題された論文の題は「どんな教員になりたいか?」という内容だった。うろ覚えであるが、私が書いた論文の書き出しは「常に子供たちの近くにいる教員になりたい。放課後、子供たちが校庭で部活動をしている様子を職員室の窓越しに眺めるような教員には私はならない。」であった。

管理職になってからは自校の教員に子供に寄り添うことの重要性を「立ち位置」というキーワードを用いて伝え続けてきた。ここでも「校長室だより・校長のつぶやき」をご覧いただきたい。

立ち位置

～センスを磨いて／全体を見て～

先週、「朝のあいさつ運動」がありました。先生方にも、早めに出勤していただきご協力いただきました。特に後半の2日間は雨に降られてしまい、たいへんでしたね。ありがとうございました。

「朝のあいさつ運動」は、基本的には、K橋方面とA橋方面と、2つに分かれて通学路に

立つわけですが、自分はどちらに行ったらいいのか？...これは全体を見て判断していただくことになります。

どちらかの橋に向かったとしても、橋の先の交差点に立つのか、橋の手前の交差点に立つのか、あるいは人数に余裕があるなら、あえて橋の真ん中に立つとか...。教員ばかりでかたまらずに、保護者の中に飛び込んでいくとか...。自分の立ち位置を、全体を見て決める...、そこにはセンスが必要です。

自分の立ち位置を考える...。これは何も「朝のあいさつ運動」に限ったわけではありません。

例えば朝会の時。先生方は、何を目的にして、どこに立っていますか？「生徒の近くにいらる」ことを基本にしつつ、生徒の後ろに立つのか、横に立って生徒の表情を見るのか...。ときには、〇〇くん特に目を配るとか、あるいは、遅刻してくる生徒への対応のために、自分の学年の後方に立つとか...。生徒への連絡事項を持っているときは、はやめに司会の近くにいることも必要でしょう。

自分の立ち位置に気を遣う。そんなセンスを、教員としてぜひ磨きたいと考えるのですが、いかがでしょうか？明日から「宿泊学習」が始まります。明後日は「校外学習」です。自分の立ち位置に気を遣っていただき、安全で楽しい行事にさせていただくよう、ぜひ、よろしくお願いします。

(2) 生徒指導と教育相談

学級担任としてだけではないが、子供たちと学校で日々を過ごすとき、生徒指導と教育相談についてはぜひ力量を高めておきたい。いずれもいろいろな手法があり、それは書物や研修会等で学ぶことができるが、私はこれらは理論より実践がものをいうもの、つまり経験によって学び、スキルを高めていくものだと思っている。

私が初任者の時（中学2年生の担任だった）、我が学級に隣町の中学校から一人のツッパリ（適切な表現ではないかもしれないが）が転校してきた。長ランと呼ばれる学生服、内部には竜の刺繍、髪型はリーゼント、つま先のとがった靴...。「その服装を直せ」と指導すれば「人を見かけで判断するな」とその生徒が返す。そんな毎日だった。遅刻がちの彼を毎朝自転車で迎えに行き、そこからは彼がその自転車に乗り私はジョギングで学校へ...、そんな日が続いた。

進級が近づいた日、その生徒が職員室に来て私に「来年も担任をしてくれ」と言った。「だったら普通の学生服で来い」と私。結局彼は新年度の始業式の日だけ、普通の学生服で登校した。始業式の朝、わざわざ職員室までその姿を見せに来た彼は、なんだか妙にかわいかった。その生徒は卒業するまで何だかんだと問題を起こして周囲を驚かせたが、立派に県立高校に合格して卒業していった。

私が彼に教えてもらったこと、それは「生徒指導は『ふれあい』と『ねばり』」。これは教育相談にも通じるように思う。そして、前述の「子供と寄り添うこと」にもつながることである。

先ほどのツッパリ生徒との思い出には後日談がある。彼らが20歳を過ぎた頃、同窓会が開かれ、私も招待状をもらった。教え子たちと飲むビールの味は格別で、つつい飲み過ぎてしまった。お開きになり、店を出た私の前に「シャコタン」の大きな車が止まった。「先生、

送ります。どうぞ。」運転席で彼が笑っていた。「おまえ（酒を）飲まなかったのか？」送ってもらった車の中で彼に尋ねると、「いつもは飲むんですけど、今夜はどうしても先生を送りたかったんで…」と彼。涙が出た。

生徒指導・教育相談においても一つ重要なこと、それは「チーム（組織）で取り組む」ということである。ひとりよがりの指導はうまくいっている時はいいが、一度壁にぶち当たった時、次の策を生み出すのが非常に難しい。同僚との人間関係（チームワーク）を大切に、一人の生徒の成長を多くの目と手で支える、そんな生徒指導・教育相談を展開したいものだ。自分の経験からこんな文章を紹介したい。（これも最近、「校長室だより」で自校の教員に紹介したものである。）

私が20歳代の頃の昔話である。

当時私が勤務させていただいていたH中学校には、20歳代の教員が4,5名おり、そのメンバーで毎日のように夕食を食べに行っていた。周囲に気を遣い、声を潜めながらも、食事をしながらの話題は、どうしても生徒たちのことになる。

「きょうちょっと厳しい練習をしたら〇〇が泣きだしちゃってさ…」と話し始めたのはバレエ部の顧問だ。しばらくいきさつを聞いた後、その生徒の担任が立ち上がる。「ちょっと〇〇に電話してくらあ…」。携帯電話なんてない時代だったので、担任は一度店を出て街角の電話ボックスに向かう。しばらくして戻ってきた担任の言葉→「大丈夫。『顧問の先生はお前に期待しているからこそ厳しく指導したんだぞ』って言ったら、『嬉しいです。また明日から頑張ります。』って言ってたよ。お母さんとも話したけど『顧問の先生を信頼してますから…』だって。」

別の日、ある生徒の担任が「きょう△△が教室で元気がなくてさ。なんか心配なんだ。」と言えば、今度はその生徒の部活顧問が電話をかけに行く。…とこんなことの繰り返しだった。

生徒指導には組織で対応しよう！とよく言われる。チームで…なんていう言葉もある。要するに、ある生徒に関わる複数の教員が（時には保護者…も）、その生徒の指導についてうまくフォローしあう…。そんな心がけが大切なのだろう。

本校でも先日、A先生から厳しく指導された生徒を、その直後に別室に呼んでじっくりと話をしているB先生の姿があった。心から「ありがたい」と思った。

(3) 学級をつくる

学級づくりは授業づくりと同じくらい面白い。子供一人一人が成長していく姿を見るのは圧巻だが、学級と言う集団が何かを乗り越えていく様子を近くにいて、いやその集団の中にいて眺めることができるのは、まさに教師冥利に尽きる。子供一人一人には個性があり、普段はあっちを向いたりこっちを向いたりしている。そんな学級が、何か目指すべきテーマを与えられてパッとひとつになるとき、背筋がゾクゾクとする感覚。学級担任になったらそんな体験をぜひたくさんしたいものだ。

「生徒指導と教育相談」の中でついつい昔話に夢中になってしまったが、ここでも過去の体験をひとつ紹介させていただきたい。校長になってむかえた合唱祭の開会式で、こんな話をさせてもらったことがある。

むかへし、私が学級担任をしていたときの話です。

私のクラスにAくんという子がいました。Aくんは歌を歌うのが大好きで、合唱の時はいつも、大きな声で、とてもいきいきとした表情で、からだを揺らしながら歌いました。本当に楽しそうでした。

でも、実は、残念ながら、彼は正しい音程で歌うことが苦手だったのです。ですから、彼がはりきって歌えば歌うほど、わがクラスの合唱はメチャメチャになってしまうのです。

合唱祭が近づいたある日の放課後、Aくんが職員室にやってきました。「先生、僕は合唱祭当日は口パクでいく！僕が歌うと、賞が取れない。それでいいですね。」私は、何て言っているかわかりませんでした。

翌日、学級で話し合いを持ちました。Aくんは勇気を出して言いました。「僕は歌が好きだ。だけど、音はずしちゃうから、僕が歌ったら賞が取れない。だから口パクでいこうと思います。」教室がシーンと静かになりました。

静寂を破って、B君が言いました。「A、歌、好きなんだろう。だったら歌えばいいじゃん。」...続いてCさんが「賞なんかどうでもいいから、みんなで楽しく歌おうよ。」...そしてDくんが「俺たちがAよりでっかい声で歌えばいいんだろ！」

...拍手が起こりました。

この合唱祭で我が学級が賞をとったかどうか、それは全く覚えていない。でもこの学級会の場面は、今でもはっきりと思い出すことができる。

4. 部活動顧問として

「ブラック部活」という言葉をお聞きになったことがあるだろうか？子供たちにとって適切な部活動とは？また、教員にとって適切な部活動とは？といった論議があちらこちらで交わされる昨今である。

そもそも部活動に対する思いは実にさまざまである。子供たちの中には「部活動が生きがい」と感じている者もいれば、逆に「部活動が負担」と感じている者もいる。保護者においても、より高度な（より長時間の）活動を期待する声もあれば、「部活動のやりすぎ」を懸念する声もある。そして教員の立場で考えると、自らが望む部の顧問になり部活動を通じて子供たちの成長にふれることに熱い思いで取り組む者もいれば、不慣れな部の顧問を任され指導や取組が消極的にならざるを得ない者もいる。

前述の「ブラック部活」に代表されるように「部活動のスリム化」が叫ばれる現在だが、また逆に部活動によって充実した中学・高校生活を送る子供たちも少なくない。運動部活動について言えば、例えば東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けてスポーツのすばらしさを再確認する機会も私たちの周囲にたくさん存在する。

私は教諭時代24年間にわたって中学校卓球部の顧問を務めてきた。（実は、陸上競技部の顧問をしたくて教員になったのだが...。）その経験の中から部活動指導について学んだこと、そして部活動指導の今後に期待すること等を記してみたい。

(1) 総意で目標・方策を設定する

中学校部活動では多くが夏に最上級生が引退し、いわゆる代替わりになる。新チームのスタートにあたって1年先に向けての目標設定をすることになるが、この過程はぜひ部員(子供たち)+保護者+顧問の総意によっていねいに行いたい。熱い思いを持つ部活動顧問が部を

率いる場合、得てして顧問の思いばかりが先行してしまいがちだが、ここでは部に関わる全ての者が目標を共有しておくことが重要である。

目標設定が終わると今度はその達成のためにどんな活動をするかということ、これもみんなで確認する。私はこの場面ではしばしば「マンダラート」という手法を用いた。「マンダラート」は今泉浩晃氏によって1987年に考案された発想法の一種で、3×3の9つのマスを用意しそれを埋めていくことにより、アイディアを整理し思考を深めていくという方法である。まず中心のマスにテーマを書き込み、周りのマスにはそれに関連する事柄（アイディア）を埋めていく。さらに周りの8マスのうち1マスを選び、そのマスに書かれていることを別の紙の中心のマスに転記して同様に繰り返す。これを何度も反復することにより、思考を深めていくというものである。

例えば中央のマスに「全国大会出場」と目標を掲げると、子供たちが意見交換をしながら周囲の8マスに目標達成のためのキーワードを並べていく。例えばその8つのうちに「サーブ力の向上」というキーワードがあったとしたら、今度は別の9マス用紙の中心に「サーブ力の向上」と記入しその周囲の8つのマスにサーブ力を向上させるための方策を考えさせる。...この繰り返しによって常に目標と方策を意識した活動を継続できたように思う。

(2) 子供たちの成長とともに喜ぶ

「できなかったことができるようになることを成長と呼ぶ。できないことをできるようにするために練習がある。」いつも練習場に掲げていた言葉である。そして子供たちの成長を支援し成長とともに喜ぶことこそ、教員の醍醐味であり使命でもあると信じたい。それは、教員だけでなく保護者にも言えることだと思っている。

子供の成長を目にするチャンスは部活動だけではないが、今まで負けていた相手に勝つ、自己新記録が出る、大会やコンクールで入賞する等、部活動では成長をはっきりと確認する機会に比較的頻繁に出会うことができる。努力と工夫の積み重ねによって、何かを成し遂げる（乗り越える）経験は、子供たちにとって将来にわたってかけがえのないものであると信じている。

私自身部活動顧問として子供たちが努力し、成長し、何かを成し遂げる姿を、何度も近くで見させていただいた。そのたびに子供たちから元気をもらい「自分は幸せ者だ」と心から思った。関東大会や全国大会に連れて行ってもらった時には、最後のミーティングで必ず「君たちのおかげでこの町を訪ねることができた。ありがとう。」と心の底から子供たちにお礼を言った。

先日教え子たちと食事をする機会があった。私が部活動顧問として最後の1年をともに過ごしたメンバーである。その年は春の関東選抜大会で3位入賞を果たし、全国選抜大会（鹿児島）では確か全国ランク18位を獲得。夏の全国中学校大会では「北の大地（北海道苫小牧）でメダルを獲ろう！」と努力を積み重ねていたのだが、何と県大会で敗れ関東大会にさえ出場できなかったという苦い思い出がある。

教え子の一人が言った。「あれから15年。私たちも来年30歳になる。そして先生は来年60歳。そんな節目に、みんなで一緒に北海道旅行をしませんか。苫小牧の体育館の前で写真を撮りましょう！」うれしかった。実現するかどうかかわからない。でも、来年に向けて楽しみにしていようと思っている。また、子供たち（いや、教え子たち）から元気をもらってしま

った。

ここで、昨年度、新人体育大会が近づいた日に発行した「校長室だより」を紹介させていただく。

明日から新人体育大会予選会。我がK中生のおおいなる活躍を、心から期待したい。

生徒の前で話したことだが、勝負事にはやっぱり勝ちをめざして取り組んでほしい。やる前から「勝ち負けは気にせずに、一生懸命に…」などというのは、言い方はかっこいいが、早い話「あきらめ」なのではないかと思う。

そして（ここが大切）、勝つことにこだわるからこそ、勝つためには…と考えるからこそ、人は自分を律して、自分を追い込んで、ガンバルことができるのではないかと思う。

卓球部の顧問をしていた頃、こんなことがあった。

ある生徒が試合で、チョー強敵を相手に第1ゲームを15・21で負けてきた。（その頃は、1ゲーム＝21点の時代だった。）正直もっとコテンコテンに負けてくると思っていたので、セット間のアドバイスで私はこう言った。

「あの選手からよく15点もとれたなあ。上デキだ。よし、次はもう2，3点多くとって来い！」

その生徒の顔色が変わった。

「先生、もう2，3点では勝てないですよ。先生は、私が勝てないって決めつけているんですか？あきらめているんですか？」

ハッとした。

子供の可能性を、周囲の大人がつぶしてしまっではいけない。そう強く感じた瞬間だった。大切な試合の前日、私はいつも生徒たちにこう言った。

「明日は先生は絶対に君たちを叱らない。だから、君たちも先生に叱られるようなことを絶対にしないで欲しい。遅刻、忘れ物は厳禁だ。そして、一日中、お互いに笑顔で過ごそう。そうすれば、結果は必ずついてくる！」

(3) 部活動とクラブチーム

部活動の未来は先行き不透明だ。前述の通り多様な期待の中で、これからの部活動はどうあるべきなのだろう。「ブラック部活」「部活動のスリム化」が話題になる現在において、活動の規模をコンパクトにしていくことは仕方のないことなのかもしれない。活動時間を減らす、週休日の活動は土・日のどちらか一日、練習試合の相手はなるべく近所で…。部活大好きの子供や心熱い顧問にとっては、やや物足りないかもしれないが、これからの部活動はこのような方向に向かうしかないような気がする。

その上で「もっと上達したい」「もっと練習したい」「もっと試合をしたい」という子供たちはどうするか。「もっと子供たちとともに感動を味わいたい」という指導者はどうするか。その答えは「部活動とクラブチームとの併用」だと私は考える。学校では定められた時刻まで部活動としてややコンパクトな活動をし、その後はクラブチームとして活動する。あるいは、一度帰宅してから学習塾へ通うのと同じようにクラブチームに通う。指導者もある時刻からはクラブチームの指導者として指導する。人によっては学校を離れてクラブチームのコーチをする。週休日例えば土・日の一方は部活動、もう一方はクラブチームの活

動とする。練習試合への参加もクラブチームの活動とし、保護者の思いと一致すれば、遠距離への（時には宿泊を伴う）遠征も可能になるであろう。

この方法が全国の中・高等学校で浸透したとき、部活動に対する多様な期待のどれにも対応できるしくみが構築できると考えるがいかがだろうか。これこそ、部活動（+クラブチーム）における究極の個に応じた指導であると思っている。

(4) 配慮・信頼・連携（便りとノート）

ここでは私自身が部活動顧問を務める際に心がけてきたことについて記すことにする。これはもしかすると部活動顧問に限って言えることではなく、教員として子供たちとともに成長していくために多くの場面で大切な心がけとすることができるかもしれない。それは一言で言うと「細かい配慮を常に忘れない」ということである。この配慮によって子供たちとの間にも保護者との間にも信頼関係を築くことができ、子供たちを取り巻く多くの人々との連携によって成果を生むことができると考えるからである。

例えば夏の練習。体育館の中はサウナのように暑くなる。当然熱中症の心配が生じる。私は子供たちに大きな水筒に飲み物を用意させることはもちろんだが、さらに「タオルを濡らして凍らせて持参しなさい」と指示した。私自身はクーラーボックスに大量の氷を用意する。そして練習前に持参させたタオルをこのクーラーボックスの中にスタンバイさせる。このタオルは休憩時間のリフレッシュに大きな効果をもたらし、同時に保護者にも熱中症対策のひとつとして好評だった。

部活動通信を発行することにも前向きに取り組んだ。子供たちの活躍のようす、顧問の思い、今後のスケジュールなどを子供にも保護者にもわかりやすい言葉で綴るようにした。日曜日に終日練習試合に出かけて帰宅した後その日の試合のようすをまとめるとき等は眠い目をこすりながら...ということもあったが、楽しい時間であったように記憶している。できあがった通信は一人の部員に2枚ずつ配布し、1枚は保護者に渡しもう1枚は部員自身が読むように指導した。私が部活動通信にしばしば掲載したアメリカの実業家・ナポレオン・ヒルの言葉（詩）を紹介する。

YOU CAN

もし君が負けると考えるなら、君は負ける。

もし君がもうだめだと考えるなら、君はだめになる。

勝ちたいと思う心のかたすみで 無理だと考えるなら、君は絶対に勝てない。

失敗すると考えるなら、君は失敗する。

世の中を見てみろ！

最後まで成功を願いつづけた人だけが、成功しているではないか。

全ては人の心が決めるのだ。

もし君が勝てる则认为るなら、君は勝つ。

向上したい、自信を持ちたいと、いつもそう願うなら、君はそのとおりの人になる。

さあ、再出発だ！

強い人が勝つとは限らない。

すばしこい人が勝つとは限らない。

「私はできる！」そう考える人が、結局は勝つのだ。

ナポレオン・ヒル 「成功の哲学」より

部員一人一人との「部活ノート」のやりとりも日々の活動をスムーズに進めるためにたいへん効果的であった。子供たちは帰宅後毎日このノートにその日の練習の内容や試合の結果、反省や感想などを記して翌朝顧問に提出。私はその日のうちに一人一人のノートに赤ペンでコメントを記入して放課後の練習時に返却する。子供が何かに悩んでいるときは「相談ノート」の役割を果たすこともあり、このノートのやりとりによって課題を乗り越えることができたことも少なくない。

これらの取組はいずれも部活動顧問として一歩踏み込んだ実践であり、繰り返しになるがこれらによって子供や保護者との信頼関係を構築し、連携を生み、成果につなげることができたものと自負している。

5. 外部との連携の中で

学校は閉鎖された空間であってはならない。保護者・地域に対して「開かれた学校」「敷居の低い学校」でありたい等、いろいろな言い方でその在り方が論じられている。歴史的に考えてみても、そもそも学校が先にあるとその周辺に地域が広がったわけではなく、先に地域あってあとからそこに学校ができたのだ。教員はこの当たり前のことを忘れてはならないと思う。

最近、文部科学省はこれからの学校の目指すべき姿について「『チーム学校』の実現をめざす」という言い方をしている。学校というと何でもかんでも教員が切り盛りしていたのを、専門スタッフや地域の人たちの力を借りて、チーム力で乗り切れるようにしようという考え方である。小中学校、高校を、大学なみにとは言わないまでも、教員を支える専門スタッフのいる大学のように、教員が授業に専念できるような体制づくりをめざそうというものである。であるとすれば、教員は子供たちの成長のために、かつ自分自身のためにも、保護者や地域とのなめらかな連携に心を傾けるべきであろう。

(1) 謙る（へりくだる）こと

教員は威張ってはいけない。子供たちに対しては、ときに毅然とした態度で指導に臨まなければならないが、こと保護者・地域との連携については「謙る」という姿勢を大切にしたいと思う。私はここ数年、臨時採用教員に対して、教員採用試験受験勉強会のお手伝いをさせていただいているが、その面接試験対策の中でよく次のような話をさせていただく。

「〇〇中学校で数学を教えている〇〇です。」私はこのような自己紹介には不快感を感じる。「教えている」という言い方が「教えてやっている」という高飛車な態度に思えるからである。この場合「数学を担当させていただいている〇〇です。」の方が好印象ではないだろうか。「〇〇中学校の〇〇です。」は「〇〇中学校に勤務させていただいている〇〇です。」というように、謙った言い方をしたいものだ。

教員は家庭から（あるいは地域から）子供たちをあずかり、彼らの成長を支援させていただくことで給料をいただいている。間違っても「子供たちをあずかってやっている、指導してやっている」のではないのだ。生徒指導に苦勞するとき、保護者の指導方針に首をかしげるとき等、自らの心に波風が立つこともあるが、教員はこのことを忘れてはならないと思う。

(2) 言葉と笑顔

外部との連携の際に武器になるもの、それは優しい言葉と笑顔である。教員はしばしば子供たちに「プラス発言を心がけ、マイナス発言はしないように...」「あったか言葉を増やし、チクチク言葉はなくそう！」などと望ましい人間関係づくりの術を指導するが、これはそのまま私たち教員にも当てはまるのではないだろうか。そして同時に言葉を発するときの自らの表情にも配慮したい。多くの場合笑顔が一番だと考えるがいかがであろう。

保護者と話すとき、地域の方々と話すとき、それだけでなく子供と話すときも、同僚と話すときも、言葉と笑顔を大切にしたい。教員自らがそれを心がけるだけでなく、子供たちにもこのことを指導していきたい。「協働」とか「対話」の重要性が叫ばれる現代において、このことは大切な不易である。

言葉の大切さに加えて「話し方を磨くこと」、これも教員にとって重要な努力事項である。このことについては私自身、高橋俊三氏から多くのことを学ばせていただいた。ここでも「校長室だより」の一部を紹介する。

(中学) 3年生ひとりひとりと行っている「校長面接」が4分の3終了した。いろいろな発見があり、実に楽しい時間を過ごさせていただいている。まず、あらためて、クラス・番号・名前を聞き、志望校を確認した後、必ず「どうしてその学校に行きたいと思ったのですか？」と訊ねる。志願理由というやつだ。先週末に面接をしたある生徒はこう答えた。

「はい、志願理由は3つあります。一つ目は、...。二つ目は、...。そして三つ目は、...です。」

箇条書き的で、たいへんわかりやすかった。

「『3つあります』という答え方はいいね。とてもわかりやすいよ。」と褒めた。誰かに教わったの？と聞くと、「よく先生方がこういう話し方をしているからまねをしました」という答えが返ってきた。うれしかった。

今、教師は、子どもたちに、的確に話しているだろうか。

今、教師は、子どもたちに、存分に語っているだろうか。

今、教師は、子どもたちを、本心で褒め、本気で叱っているだろうか。

今、教師は、子どもたちの声に、真剣に耳を傾けているだろうか。

これは、高橋俊三氏著「教師の話を磨く」の冒頭部分である。高橋先生とは総合教育センターに勤めていたころに直接お会いしたことがある。講演会の講師としてお招きしたのだが、「私は群馬県で長く仕事をしていたのですが、群馬には高崎と前橋という2つの大きな都市があります。その高崎の高と前橋の橋をつなげて、私は高橋と申します。どうぞよろしく...。」と始まる御講演は、実に面白くかつ聞きやすく、時間があっという間に過ぎたように記憶している。

今こそ、教師に話す力が求められている。同時に、教師に聞く力が求められている。これも高橋先生の本からの受け売りであるが、人の前で話すことを職業としている私たちは、常に 正確に／わかりやすく／感じよく 話すための努力と工夫を忘れてはいけないのだと思う。(…と自らに言い聞かせつつ...。)

(3) 若手教員へのメッセージ

これも臨時採用教員に対して話したことだが、私は若手教員にこそ外部との連携に積極的に心を開いてほしいと思っている。教員の中には、PTA役員さんや地域の方々との連携は管理職や教務主任・学年主任等の仕事だと思っている者がいるが、これは間違いである。例えばPTAのTはteacherのTであり全ての教員がPTAの一員であると考えれば、教員はPTA行事にもっと前向きに取り組むべきはないだろうか。

昔話で恐縮だが、私は初任者教員のとき管理職に誘われるままにPTA研修旅行に参加したことがある。参加した教員は私以外は全て管理職・主任たちだったが、PTA会長さんが私が参加したことをたいそう喜んでくださって、バスが見学地やドライブインに着くたびに私に声をかけてくださり、また帰りには土産をたくさん買って持たせてくださった。やや肩が凝る一日ではあったが、この日のおかげでPTA役員さんや保護者たちとの距離がグーンと近くなったように感じたことを覚えている。

若い教員にとってみれば、子供たちの指導だけで精一杯なのかもしれない。でも子供たちの指導をよりスムーズで滑らかなものにするためにも、外部との連携に積極的に目を向けてほしいと思う。その姿勢は必ず教員自身を成長させ、ひいては子供たちへの指導にプラスになるものであると確信するからである。

6. 学校管理職として

学校管理職としては、教頭を2年、校長を7年経験させていただいた。その前に指導主事という仕事を5年経験したので、合計14年間は学級担任とか部活動顧問とかいう仕事とは少し異なる役割に就いてきたことになる。その場その場でいろいろなことを感じ、学んできたつもりだが、子供から離れれば離れるほど「子供に寄り添う」ことの大切さを再認識するようになった気がする。

(1) 視野を広げる

私が一度学校を離れたのは、教員になって25年目の春だった。市・県の教育委員会で合計5年間、指導主事として視野を広げる機会をいただいたのである。「子供に寄り添う（子供の近くにいる）」ことをモットーに生きてきた自分にとって、この5年間は思えば実にさみしい時間だった。指導主事として十分な仕事できたのかという反省の念もあり、今でも定年退職までずっと学級担任・部活動顧問として、子供たちと熱いハートで関わりあう生き方をしてもよかったのではないかと考えることがある。

しかし、この5年間で得たものは実に大きく、自分の人間としてのスケールを確実に広げてくれたと信じている。教育行政の中で仕事をしたからこそ出会えた方々、出会えたできごとの数々...、それらは間違いなく今の自分を支えてくれていると感じている。「新しいことに飛び込んでいくには勇気がいる。胃が痛くなるようなこともある。でも、何年かたった時それは必ず自分のためにプラスになる。」私はこのことを若い先生方にぜひ伝えたい。

(2) 教頭の役割

教頭として務めた2年間は、生徒指導にやや課題のある中学校であったこともあって、生徒の心の荒れを修復し、学習環境を整えることを第一に考えて学校運営に取り組んだ毎日だった。

た。教頭の役割は、校長を助け、校務を整理し、必要に応じて児童・生徒の教育をつかさどることであるが、今振り返ってみるとこの役割をきちんと果たすことができたかどうかは、いささか自信がない。ただ、毎日目の前で起こることにまっすぐに向かい合い、学校全体が少しでも正常になるように努めていたように思う。こんな思い出がある(「校長室だより」より)。

教師冥利に尽きる という言葉がある。この日の出来事は、まさにこの言葉どおりの出来事だった。

中学3年生のK。矢沢永吉ファンのやんちゃな生徒である。そう、昭和のにおいがするツッパリ...だった。

1学期、教員の指導に従わず、よく暴れた。教員が何人も集まって、力づくでそれを抑えた。私もそんな場に加わったことが幾度かある。

私のことを「教頭～」と呼んだ。でも、どこか憎めないやつだった。

2学期の中頃からだっただろうか。そんなKが変わりはじめた。だらしなく開けていた学生服のボタンを閉め、髪型をさっぱりとした形に変えた。教員の指導に素直に従うようになり、冷静に私たちと話ができるようになった。

11月頃、校庭で仕事をしていた私を、Kは3階の窓から初めて「教頭先生～」と呼んだ。その時の風景を、今でもやけに鮮明に覚えている。

そんなKが、きょう県立高校に合格した。真っ先に学校に電話をしてきた。担任の先生の表情がパッと明るくなった。受話器をボタンタッチしてもらった。

「K、やったな。いい日になったな。」

「うん、きょうは親父の誕生日なんだ。だから本当にいい日だ。」

不覚にも目頭が熱くなった。

その後学校にやってきたKは、校長先生にまで自らしっかりとあいさつをした。「俺はきっと内申点なんか最低だったと思う。ピンチだった。でも『ピンチはチャンス』だと思って頑張ったんだ。」

『ピンチはチャンス』この言葉は、実は校長先生の口癖だった。

教師冥利に尽きる という言葉がある。この日の出来事は、まさにこの言葉どおりの出来事だった。この仕事、これだからやめられないんだよな～。

そんな中でも、生徒の心を見つめることから道徳教育について深く学ぶ機会を得たり、教員が元気になることが生徒が元気になるための第一歩であることを確信したり、PTA活動の事務局を務めることで保護者・地域と学校の橋渡しをしたり、教諭時代とは異なった角度から学校を見つめることをたくさん学べたと思っている。

(3) 開かれた校長室

校長になると一人になれる部屋を与えられる。その空間で学校経営についてじっくりと考えを練りなさいというわけだ。中にはその教えを忠実に守って校長室にこもる校長もいると聞く。確かに私もそうした時期があった。あるいは今でもそういう時間もある。ただ大半は校長室の全ての扉を開け放ち、子供たちや先生方やそして来校者の声を精一杯吸収するよう努めている。名付けて「開かれた校長室」。私のこだわりである。

校長室の扉を開いておくと子供たちがよく声をかけてくれる。朝夕のあいさつはもちろん、

昼休みに友人関係や部活動の相談をしに来る者や数学の教科書とノートを持って質問に来る者もいる。教員もしばしばやってくる。頭を抱えてしまうような相談を持ってくる場合もあるが、「校長先生、聞いてください。きょうの授業でこんなことがあったんですよ。」なんていう話は実にうれしい。「今度私も授業におじゃましていいかい？」と話が発展する。保護者の相談も大歓迎。何度か宅配業者が事務室と間違えて荷物を届けてくれたこともあった。開かれた学校づくりは「開かれた校長室」からと考えるがいかがだろうか。

(4) 人を育てる

校長の職務は実に多岐にわたる。学校経営と一言で言われ、ヒト・モノ・金を管理するのだとかつて管理職研修で学んだ記憶がある。でもやっぱり究極は何かと考えると、「人を育てること」なのだと思える。子供を育てる、その子供を育てる教員を育てる。このことを第一に考える校長でありたい。「育てる」というとおこがましいが、自らの思いや経験談を若い先生方に少しでも伝えることができれば...と日々考えている。

前にも記したが、ここ数年は教員採用試験を受験する人たち（臨時採用教員・大学生）を対象に勉強会を開いている。週1回のペースで実施し、今年度の場合は17回の勉強会にお付き合いさせていただいた。面接試験を受ける際のコツ、論文の書き方、集団討論のポイント等、内容は様々だが、子供たちを育てるという職業に就くために大切な心がまえのようなものを伝えられたらいいと思っている。来月には合格発表の日を迎える。いくつの吉報が届くだろう。首を長くして待ちたい。

以前一緒に部活動を指導した先生が管理職選考に合格したという知らせをいただいた。採用試験だけでなく、若い先生がこうして自らのキャリアアップにチャレンジしていくことをたいへんうれしく思った。その時に書いた「校長室だより」を紹介したい。

県内の小学校で働くT先生（38歳）から久しぶり（何年ぶりだろう？）に電話をいただいた。「事後承諾ですみません。岡部先生から教えていただいた『子供はみんなダイヤモンドの原石』っていう言葉、管理職試験の論文と面接で使わせていただきました。」...。その後昔話に花が咲き、「ではまた...」とあいさつを交わした後も、私より先に絶対に電話を切ることをしない...。...以前のままだった。

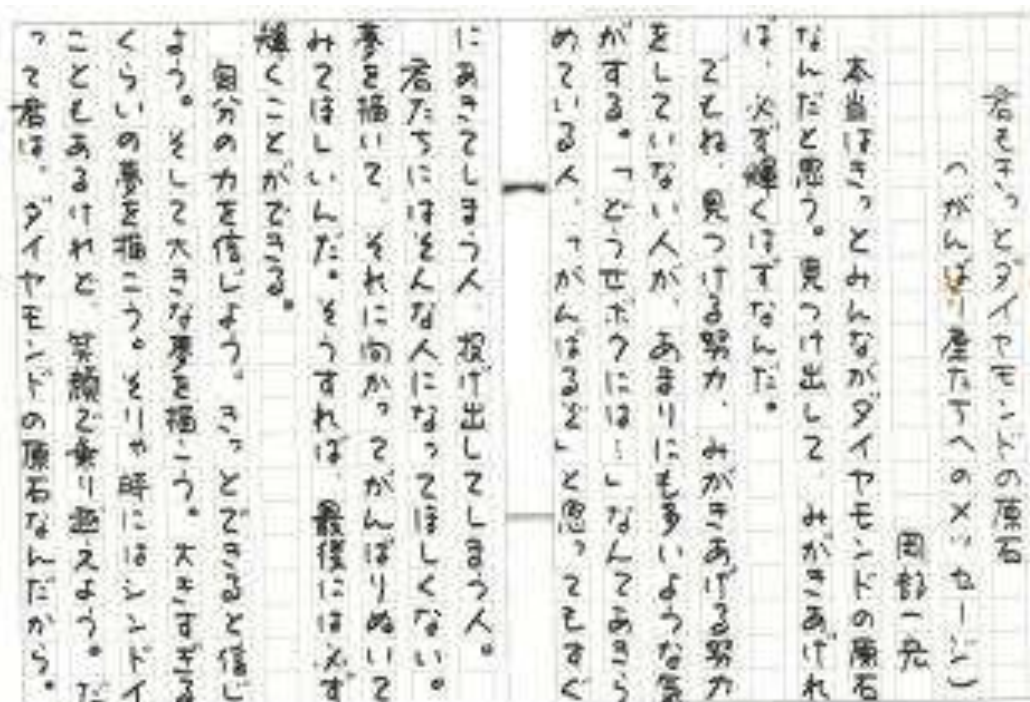
T先生と私の出会いは、彼が大学院で学び、私がH中の卓球部顧問の時だから、もう15年くらい前になる。彼は卓球の達人だったので、H中卓球部のコーチとしてご活躍いただいた。たしか当時S市に住んでいたのだが、よく車を飛ばしてH市まで来てくれて、本当に熱心に子供たちを指導してくれた。

子供にアドバイスをするとき、子供を立たせ、自分はしゃがみこんで、子供の視線と自分の視線を同じ高さにして話をする...。その姿を見て「このコーチただものではないな...」と思ったのを覚えている。

大学院卒業後、彼は小学校の教員になり、同時に卓球のクラブチーム（小学生チーム）を立ち上げた。抜群の指導力と保護者の皆様とのサイコーの人間関係づくりによって、「Sクラブ」は、男女ともS県チャンピオンに輝いた。この時の子供たちがその後I中学校に進み、全国中学校大会で優秀校として表彰される（全国ベスト13）までに成長したのである。

「お子さんはいくつになったの？」と聞くと「小学校1年生と4歳です。そろそろ卓球を始めさせたいのですが、仕事が忙しくて...。」と笑っていた。

T先生からいただいた電話によって、私自身、久しぶりに思い出した「子供はみんなダイヤモンドの原石」考を以下に紹介したい。



(5) 校長講話は校長道徳

校長になると人の前で話をする機会が飛躍的に増える。若いころは「校長先生になると多くの人の前で自分の思いを話すことができいいなあ」と思ったこともあったが、いざ自分が校長になってみるとそれは全く逆で大きなプレッシャーを感じてしまうことばかりである。

そんな中で全校生徒の前で話す学校朝会の校長講話だけは、ちょっぴり楽しみにしている自分がいる。ここ数年道徳教育の研究に関わっていたこともあって「校長講話は校長道徳」という思いで講話の題材を探すのが楽しい。今年度は「向上心と思いやり」を通年のテーマにして、1学期は「自ら限界を超えること」2学期は「仲間とともに奇跡を起こすこと」...といった内容で講話をすすめている。

朝会の講話は毎回10～15分程度だが、担任の先生がその話題を教室に持ち帰って道徳の授業で膨らめてくれたり、子供たちに感想を書かせてくれたりさらにそれを学級だよりで紹介してくれたりと発展させてくれると、「校長講話は校長道徳」が実践できているように感じてうれしくなる。「限界を超える」というテーマで私自身の部活動指導の体験を扱った校長講話の内容を紹介したい。

神様がくれた逆転勝利（「のさっち」のこと）～学校朝会「校長講話」より～

「のさっち」という子がいた。もちろんニックネームだ。カットマンだった。H中時代のことである。

彼女の学年は、部員が4人。その下の学年は、たった2人。4人+2人で合計6人。団体戦戦うにはピッタリ的人数。別の言い方をすると、1人も欠けることができないギリギリの

人数での関東・全国への挑戦だった。

冬はたいへんだった。風邪をひくこともできない。人数が足りなくて団体戦に参加できなくなってしまうからである。

キャプテンの「キタちゃん」は腰痛に悩んだ。「先生、きょうは無理です。プレーできません。」そういう日は「キタちゃん」を5番においた。そして、他の5人に言った。「キタちゃんまでまわすな。3対0か3対1で勝て！」

厳しい冬を乗り越え、やっと春の日ざしが感じられるようになった、3月のある日のことだった。2年生のまとめの保護者会で学校に来ていた「のさっち」のお母さんが、その帰りに体育館にやってきた。「先生、お話があります。実は主人が4月から甲府に転勤することになりまして、家族で引っ越すことに...。」耳を疑った。「のさっちが転校してしまう。メンバーが1人足りなくなってしまう...。」でも、そのとき、私は優しくほほえんで（実は少し表情がひきつっていたかもしれないが...）お母さんに言った。「さみしいですけど...。甲府でも卓球を続けてくれるといいですね。」

数日後、お母さんから連絡が入った。「娘と私は、もう1年この町に残ることにしました。娘が『私が転校しちやったら卓球部の人数が足りなくなってしまう。どうしても6人で関東大会に行くんだ!!』と言うものですから...。」

「えっ？」うれしかった。ジーンときた。でも同時に「ホントにいいのかな？」とも思った。卓球のせいで家族がバラバラになってしまう。お父さんはものすごく寂しいに違いない。でも、こうなったからには、「のさっち」に、そしてご家族のみなさんに「この町に残ってよかった」と思っていたかなくてはならない。そうでなくては、申し訳ない。私は熱いものがこみ上げてくるのを感じていた。

5月の県大会。やっとのことでベスト8に入った。でも正直、もうひとつ勝つのは至難の業だと感じた。

「とにかくやるだけのことをやってみよう。」休みの日はすべて試合に出かけた。必死で練習した。ほんの少しずつだけれど、心のどこかに小さな自信が芽生え始めていた。

7月。関東大会予選会。S県から関東大会へコマを進めることができるのは、5チーム。組合せ抽選の結果、我がチームは予選リーグで5月の県チャンピオンチームとあたることになった。強敵だ！でも、この試合に勝てば、関東出場が決まる。私たちは「あたって砕けろ」という気持ちで強敵に挑んだ。

1番、エース対決。相手はシングルの県チャンピオン。しかしこの日は我がエースが2-1（第3セットは21-19！当時は21点制）で勝った。2番、3番は健闘むなしく敗れた。4番、相手は準エース。ウチは2年生のカットマン。相手の攻撃を無心で拾い、奇跡の大金星。そして5番、「のさっち」登場。

相手もカットマン。長いラリーが続く。まさに、ねばりあいだ。1セットずつをとりあっていよいよ最終セット。「6人で関東大会に行くために、この町に残りたい」あのときのことが私の脳裏をよぎった。

.....がしかし、ふと気がつくと6-17。相手が大きくリード。あと4点で相手の勝利。私たちは敗者復活リーグで今一度苦しい戦いをしなくてはならない。「まあ、それもしかたがないか。」私はすでに心の隅で、敗者復活リーグであたることになるであろうチームのこと、

そしてどんなオーダーで臨むかなどを考え始めていた。

一度はあきらめかけていたベンチの応援の声が、元気を取り戻してきたことに気づき、得点板を見ると、そこではまさに「奇跡」の大逆転劇が展開されていた。10点以上あった得点差を 「のさっち」は、ねばり強いプレーで1本1本挽回し、ついに 19ー19に追いついたのだ！

「関東大会に行くためにこの町に残る」そう決めたことに対して、そしてきょうまで無心で頑張ってきたことに対して、「卓球の神様」が微笑みかけてくれている。そう思えた。胸が熱くなった。夢中で応援した。「のさっち」の姿がぼやけて見えなくなった。（こうしてパソコンに向かっている今でさえ、思い出すと目頭が熱くなる。）そして、ついに 21ー19。ゲームセット。大逆転勝ち！バンザイをした。「のさっち」と握手をした。ベンチのみんなと握手をした。...でも、本当はよく覚えていない。

「のさっち」、元気かい？「奇跡」って、本当に起こるんだね。そのことを教えてくれた君のこと、いつまでも忘れないよ。

7. おわりに

自叙伝のような論文になるとはじめにことわらせていただいたとはいえ、本当に自分勝手な文章を羅列することになってしまったことをお詫びしたい。ただただ自らの経験をもとに、若い教員に伝えておきたいと思ったことを素直に記させていただいたつもりである。異論をお持ちの方もたくさんいらっしゃると思うが、私自身の人生を38年前からやり直すことは到底できることではないのでお許しをいただきたい。

ただ、その時その時において周囲の状況を考慮しどの道を行こうかといつも真剣に考え判断して歩んできた。そう、これからの（いや、今までもだが）教員にはこの「気づく力」と「判断する力」がより一層必要になるであろう。目まぐるしく変化する時代において子供たちを育むには、その目まぐるしさに忙殺されることなく子供たちの成長を常に第一に考えて、熱い情熱を持って教育に携わる教員が一人でも多く誕生することを願ってやまない。

教員の役割は重要である。教員の仕事は楽しい。そう思えるような一例を最後に紹介してペンを置かせていただくことにする。

あてずっぽからの奇跡

～意識を変えると相手も変わる～

ある学校に、一人の心理学者が講演に来た。講演が終わった後、その心理学者は教室に少しだけ顔を出した。

その心理学者は教室の後ろから40人くらいの生徒をざっと見て、そのクラスの先生に小声でこう言った。

「あの生徒と、あの生徒、そしてあの生徒ね」と、3人の生徒を指さして、「あの生徒たちはこれから成績がぐんと伸びるから気をつけて見ててくださいね」...

それから数ヶ月して、何とその3人の生徒の成績は飛躍的にアップした。先生は、驚いてその心理学者に電話をした。

「どうしてわかったんですか？」

その心理学者は生徒を、後ろから、しかも、数秒眺めただけだった。それだけでどうしてこれから伸びるであろう生徒がわかったのか？先生は不思議で仕方がなかった。

「なぜ、その３人が伸びることを先生（心理学者）は予測できたのですか？」

すると心理学者はこう答えた。

「あてずっぽです」

心理学者の「この３人の生徒の成績は伸びる」という一言で、実は先生の意識が変わったのではないだろうか。その生徒達を見る目が変わったのではないだろうか。先生の意識が変わった結果、その生徒に対する教え方や接し方が微妙に変わり、その生徒は伸びたのでは…。

あなたの見方が変わると、ひょっとして、あなたの周りにいる人も変わるのかもしれない。自分が変われば周りも変わる。逆に言えば、状況を変えたかったらまず自分を変えることだ...ということなのかも…。